館報 たつおか

発行所
飯田市竜丘公民館
編集人
竜丘公民館
広報委員会
印刷所
龍共印刷株式会社
上郷町黒田電(22)5353

館報30年の変遷

育くまれた 村の声 地域の姿
本紙一五〇号を迎える

歴史を語る題字

公民館報が発刊されて、本紙で150号を迎えた。発刊は昭和23年3月1日、来年3月には発刊30年となる。この30年は日本にとっても大きな変化のあった時代、竜丘にとっても村から市へと変り、さまざまに竜丘の将来について議論されてきた。その中で館報が150号を迎えたことは、編集にたずさわった方々の公民館活動に対する理解と実践への努力によるものと考えている。

新しい動き「分館報」発行あいつぐ

竜丘公民館が設立されたのは、二十三年三月で、当時竜丘中学校長であった木下右治氏が初代館長となって、組織を作り活動がはじまった。この時の情報部長であった久保田経男氏等の手により、第一号が発行された。第一号は六ページで、記事は次の様なものであった。「公民館の発足に当て」村長前島頼輔。「公民館の誕生」館長木下右治。「挨拶と抱負」芸能主部事吉沢俊。「みんなの公民館」教養部主事橋本玄進。「公民館図書館の出発に際して」図書部主事北沢小太郎。「雑感」産業部主事下平貞雄。「体育部について」体育部主事原光人。「公民館と保健衛生について」保健衛生部主事北原公祐。「竜丘公民館組織」「公民館とは何か」「竜丘公民館館則」「三月六、七日公民館開館式行わる」「開館式を待つ」中田今朝子……等。

当時は、年四～六回の発行で、記事は依頼原稿が主であった。二十九年頃までは、当時公民館長であった北沢氏、主事の下平氏等により編集され、一時的に青年会で編集した事もあった。二十九年頃からは、技術的にも大きく伸び、紙面に意欲的なものが見られる。

その後部員構成は、各部落代表者から一般適格者数名で編集するようになり、現在も引き継がれている。竜丘の館報の特徴の基が作られた。

題字の変遷にふれておくと、第一号が「竜丘村公民館」で、二号から「竜丘村」となり、飯田市合併までの間に「たつおか」「竜丘村公民館報」と変り、合併後は「飯田市竜丘公民館報」「飯田市」と変り、市の統一版が発行されなくなってからは「館報たつおか」となり現在に至っている。

館報の発行は、その時々に試錬に耐えてきた。初期には占領軍によるレッドパージで検閲をうけたと聞く。記事内容について横槍が入ったり、ボツになったり、呼びつけられて怒られたり、問題個所を消されて配布させられたりしたことがあったと聞く。飯田市合併後、市財政の赤字解消のため四十一年度から地財法が準用され、社会教育費の減少に伴ない印刷費が激減し、一時は館報の発行が出来なくなり休刊した地区もあったが竜丘では発行回数を減らし、タイプ印刷（第一二〇、一二一、一二四号）、地区費の徴収などできりぬけてきたという。又地財法の準用前後に、地元の印刷所を使えとの市の指導が強まり、三か所ほど印刷所が変ったが、再び松本の信州印刷に変り最近まで続いた。この理由は、信州印刷が県内で唯一の扁平活字を持っており、特に館報等の印刷を専門にやっていたことによる。場所が遠いことで、当時編集が終ると電車で松本まで持っていき一泊し、ゲラ刷りが出来るのを待って校正をしたという。

最近の館報の新しい動きとして三年ほど前に時又館報が発刊され続いて上川路、長野原分館でも独自に分館報が発刊されてきている。館報の役割は一口に言えば「地区の実態を知らせ、地区民の声を聞き、地区の進むべき方向を示唆すること。」といえる。我々は今日まで常に住民の目となり、耳となり、口となるよう努力してきた。古い資料ではあるが、三十八年の公民館調査が示しているように、我々の努力にもかかわらず約四十%の人が館報に住民の声が反映されていないと答えている。この事は今日でも当てはまるかも知れない。

分館報発行という新しい動きの中で、より身近なことは「分館報」で、地区全体のことは「館報」でとの分担が出来るとすれば、館報が本来の役割をはたせるのではないか。分館報の継続的な発行を願いつつ、我々も住民と結びついた館報にすべく努力したい。

青年の主張
農業後継者のつぶやき

この頃農村へのUターン現象を歓迎したり一時期急激な減少傾向をたどっていた農家戸数及び農家人口が、この頃鈍化傾向にあるのを歓迎する内容の文章や記事をよく見る。

これらは、多分農業を票田としている政治家やその関係の人々が騒ぎ立てているのだろうが、我々当の百姓がこの尻馬に乗って「減っては困る」「鈍化傾向は良い事だ」等と彼等と一緒になって騒ぎ立てる必要は無いと思う。我々が「どうらく」や「奉仕」で農業をやっているのならそれも良いけれど、自分の経営に有利になり、経済力ももっと拡大する様に考える事が第一であり、そんな事はそれこそ彼等に任せておけば良い事である。百姓がいやになってやめたい人はやめれば良いのであって、農業一本で生活しようとしている我々にとって農家が減る事は、競争相手が減る事であり、それにより土地拡大も出来得る。そうすれば今の様な不平等の割に合わない百姓も、経済的にも精神的にも恵まれた生活が得られる。それによって今騒いでいる様な農業後継者不足も解決すると思う。我々農家も一戸の企業なのである。

ある本に、国内純生産と就業人口負担とのつり合を表に記されていた。それによると、第一次産業の所得の分け前は七・一%、第二・三次を合わせたものは九十二・九%で、七・一%の内農業の所得分け前は四・七%である。一方就業人口比を見ると、農業十一・九%、第二・三次産業を合せて八十六・八%。わかり易く言えば、農業は四・七%の分け前所得で、十一・九%の働き手を養っている事になる。第二・三次産業は、九十二・九%の所得分け前で八十六・八%の就業人口を養っている。分け前が四・七%なら、養う人にも四・七%で良いはずである。これでは二倍以上の過重負担である。

第二・三次産業に対し、安い賃金で兼業労働力を提供して低賃金の不足分を農業から補給している事に気が付かないでいるといつまでも今の状態が続くのではなかろうか。兼業農家中心の減反政策など全くナンセンスであり、Uターン傾向がどうこういっていては本当の農業後継者が育つどころかブレーキになると思う。（今村健）

須恵器窯跡
調査に取り組む ―宮洞地籍―

竜丘村誌の編纂がなされていた当時、桐林の宮洞に散在する須恵器を焼いた窯跡が調査されたことがあった。

その後、昭和三十八年八月に立正大学の史学科の学生達が、坂詰講師の指導で一基を発掘、その翌年だったか、下伊那の考古学会が大沢先生をリーダーとして、更に一基が発掘されている。

最近桐林から、三日市場へ通じている市道宮洞線が改修されることになり、更に城手洞に市営墓地造成の動きもあるなどして、宮洞一帯が開発化の兆しを見せて来た。

民俗資料委員会では、この際、須恵器の窯跡を再調査し、分布図を作成し将来の開発に対処する事となった。ところが、大沢和夫先生を通じ文化庁から、この窯跡調査の依頼があり、急遽十二月十一日を初日として調査が開始されることとなった。

既に村誌にも記載されており、過去に発掘された方々の報告書も発表されていて、大凡宮洞の窯跡の学術価値の高いことが指摘されている。

宮洞地帯に職人が入り、土器造りに専念したことは、十余基に及ぶ窯跡の現存することや、「河内が洞」など呼ばれている地名の残っていることから、以前より知られていたが、その時代が平安時代の中期とか、その文化的影響を三河地方に強く受けている等は、最近になって分ったことである。

そして当掘された窯跡をみると、そのつくりは半地下式の無段式登り窯形式である。おそらく、他の未発掘の窯もこの形式のものと思われる。

今度行われる調査により、はっきりした位置の確認がなされる事から、今度の保存対策について検討される予定である。

最新鋭 ジープ四輪駆動入る
消防車入魂式

新しい消防自動車の入魂式が、十一月十五日午前十一時より市役所竜丘支所に於て、飯田市消防団長をはじめとする消防関係者、自治会長をはじめとする地元代表者等約三十名が参加して厳粛に取り行なわれた。

市内十四分団に毎年一台づつが更新される為、竜丘分団の自動車も十四年目の更新となる。

新型車は、最新鋭のジープ型四輪駆動車で、ホース延長がより早く行われる為の背負い式ホースリュックや、消火栓からの吸上げや中継送水が容易に出来る吸管、吸口等、装備も一層充実されている。

火災多発期を迎え、高性能の消防自動車を充分活かせる団員の能力の向上と、何よりも、此の消防自動車の活躍する姿を見ないよう地元住民の普段の注意が最も望まれる。

◎昭和五十三年度消防団人事

分団長…長谷部進　副分団長…下平吾郎　消防部長…高島勝秀　庶務部長…小沢勝昭

◎民生委員人事

竜丘民生委員協議会が五日行われ次の様に新しい地区担当者が決った。

木下一（駄科・長野原）下平英俊（駄科）北沢小太郎（駄科）前沢五雄（長野原）奥村四郎一（時又）伊原節子（時又）林順三（桐林）林広夫（桐林）橋本玄進（上川路）

新旧委員は細部に亘って引き継ぎを行ない、本年度から一名増員と成り、これまでの各部落、組合担当が少し変った。詳しくは、新らたにご報告致します。

随想リレー【105】
満州の想い出

上川路　井口正三

今から四十年前の昭和十二年九月満州開拓の松島移民団に両親に連られて今では其の跡もとどめていないが開善寺前という小さな駅とは名ばかりの停留所が当時の伊那電にありここから小学校の友達に送られて出発したのが小学校五年生の秋、駅頭で担任の矢沢先生に「元気でやれよ」と肩をたたかれた時は生れて初めて味わう別れる事の悲しさを頬を伝わる一すじの涙に感じながら車中の人となる途中第二次入植の人達と一緒になって日本を離れる港敦賀に着きハルピン丸に乗り五色のテープに送られて出航、三日目の朝夜明の朝鮮（現在の朝鮮民主主義人民共和国）の港清津に上陸。日本ではまだ夏の名残りをとどめるようにのどかな九月の上旬だというのに、どこか肌寒ささえ感じさせるような青いものといえば遠くにみえる山の数本の朝鮮松、赤ちゃけた土の上を頭の上に物をのせて運ぶ朝鮮の人達の甲高い話声が今も心の奥に残る。吉林行の列車に乗る途中満州にはいってからの京図線の風景は内地で想像していたような広大な原野の趣はなく長白山脈の端を通って行くので内地の景色とあまり変りない時折車窓を通り抜けて行く現地人の部落に満州にきたのだという実感を味わいながら数日後入植地吉林省の紅密峰に着き現地人の家を改造した民家に落着き物珍らしくよって来る満人の子供達の目にはどこか親しみを感じた日本人が風呂に入るのが珍らしい様子だった、未だ治安が保たれていな地区の為に数日後夕方突然今晩匪賊が襲ってくるかもしれないから女と子供は駅の鉄道警備隊に避難する様にとの連絡、母に手をとられてわずかの食糧と日の丸の旗をもって駅に避難するこんな繰り返しが何度かありましたが昭和十三年の暮頃よりこの様な事がなくなりました。その当時入植者の学童が少い為にしばらく吉林市の学校へ通っていました。市の警察署の前に匪賊の晒首があるのを子供心に好気心を抱いて友達と見に行ったのを想い出すが当時同じクラスに満人や朝鮮人の子供も共学をしていたがなぜかさそっても見に行こうとしなかったのが今も心に残る。家族の呼び寄せで子供もふえ開拓団に初めて学校が出来、学校とは名ばかり民家を改造した粗末なもの、一年生から高等科まで一人の先生が担任された。初めて先生が河原先生（現在の竜丘自治会長さん）で施設も設備もなく内地より取り寄せた教科書だけの教育は大変だった。雪どけと同時に春と夏が一緒に来たように柳が青々と茂り、アカシヤの花が真白に咲き、小川にはナマズやハヤがむらがり、野には兎やノロ（鹿の一種）やキツネ等今の飯田地方には夢にもみられない美しい自然。終戦後開拓団の引き揚げの悲惨な体験を昭和十六年戦争の始まる前に家庭の事情で両親と別れて内地に帰って来たので知らないのか子供心に映った満州の地に機会あればもう一度訪れてみたい期待を胸に幼い心に映った満州の想い出を綴ってみました――

ヤブ蚊

今年も又お米の減反のニュースが流れ、農家にとっては暗い年の瀬となりそうです。農協が中心となり、作付け転換の指導に歩いているが、どういうものか二十数年前、社会科の先生がこんな事を言った。

「現在我国ではお米が二千万石不足している。主食であるお米が取れなければ日本は大変なことになる。そこで将来は百姓をやる者は国家試験を受けて合格した者だけが農業従事者となる様にせよ」昭和二十年代はこの地域の産業は農業が主流であったから、筆者もそんなテストに受かるだろうかと心配したものだ。それが前記の変り方である。

当時の人口約八千万人、お米の生産六千万石であるから、日本の農業技術、農業の努力には驚異の他あるまい。しかし良く考えて見れば今ひとつ不思議な事もある。

それは二十数年前、学校給食が進みパン食が普及し、米の消費が減った事も事実である。では農家の暮らしは向上したであろうか。機械化に追われ三チャン、二チャン農業に追われてはいないか。初冬の麦ふみ、春の風物菜の花畑は消えてしまい輸入が急増している。

酪農、養蚕、養豚……どれを見ても満足に農業経営が成立するものはない。米だけは〝食管法〟に守られた唯一の作物であり安定した作物であった。それが減反に次ぐ減反では暗い年の瀬である。

農業は神代の昔から人類の最も大切な産業であったが、経済的、政治的に最も苦しめられて来た産業でもある、これが今後も続くのであろうか。

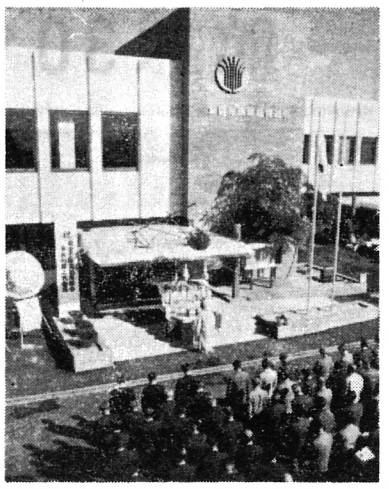
過日竜丘農協の地に「飯田市農業協同組合の本所」が完成した。ここは農業技術の指導はもとより農民と農業を守る拠点となってもらいたいものだ。

円高で揺れる日本経済は私達には無縁のものと思われていたが、全講連は輸入飼料で多大なカワセ差益があるのだから即ちに価格を下げるべきであり、石油も下がるはずだ、今こそ農協は揺れる日本経済に向って農業と農家の暮らしを守り、農民パワーの推進力、その拠点であってほしい。

農協本所完成

農業の飛躍の場に

だが農協本来の姿は何処へ



合併四年目、念願の飯田市農協本所事務所が十月二十五日完成し十一月一日より業務を行なっている。十日十一日には関係者約三百名が出席し竣工式が行なわれた。

これにより「飯田市農業協同組合竜丘事業所」の看板から建物正面の「飯田市農業協同組合」の文字とシンボルマークにと、竜丘農協のイメージは全て無くなり、敷地内の建物全てが近代的な真新しいものになった。基幹倉庫・繭受入所・水稲育苗センター・ライスセンター・稚蚕飼育所・移転された選卵所・八月完成した生活センター・農機具センター・ガソリンスタンド・肉畜集荷センター係留所と、建物は周囲に、中央の空地は舗装されて駐車場になった。

本所事務所新築は、合併三か年計画の最後の懸案であり、四月六日着工した。二億一千七百万円余を投じ、鉄筋コンクリート二階建一階一〇九四㎡、二階九五六㎡の規模である。自動ドアの正面玄関から入ると広々とした感じで、ホール・事務室・営農相談室・応接室・役員室・会議室・機械室等、二階は、大・小会議室・料理室・研修室三部室がある。三名の役員が常勤し八十四名の職員がいる。

これに関連して生活センターも九月末新築開店し、営業時間も夕方六後迄と利用され易くなった。ガソリンスタンドも移転され係がいつも居ることになり今迄のわずらわしさは解消された。

完成を記念し、組合員には「農協いいだし特集号」とタオルが配布された。十九・二十日には、農協法施行三十周年記念を合わせ「大農協祭」が行なわれた。婦人部の生活展・農協青年部の青空市・各種展示会・表彰が行なわれ、大会議室では舞台開き素人演芸会が開かれ竜丘民踊クラブ他七地区の出し物があり、多くの人で賑合った。

「この本所事務所が広く地域の皆様の心のよりどころとして利用活用され、大いなる飛躍の場となることを祈念し今後一層各位の御指導と御協力を賜りますことをお願い申し上げます。」と滝沢組合長の記した新しい一ページ。円高不況経済、来年度大幅減反と厳しい情勢の中、当面は水田総合利用（減反）をいかにして行くかが課題であろう。特に兼業農家には「何を作ったらいいんだら？今さら麦でもしょうないし」という声が聞かれる。組合員の創意と農協の指導体制が望まれる。心配された農協出入口は、農協側へ水路を一㎡移し道幅を広める方向に決定され進んでいる。広々とした事務所に恥じない余裕ある組合員の生活経済は誰もが望む事であろう。緑の少い敷地内、夏の日ざしに緑の木陰が欲しいかも知れない、せめて地区内の緑が役立つ様大切にしていきたいものだ。その為にも農協の果す役割を発揮して欲しいものである。

技術・心身の向上を

柔道・少年野球両教室活発に！

この程竜丘柔道教室が開設された。この教室は、まず柔道技術の習得を始め礼節の研修を通じ心身共に健全に相互の親睦を目的に五十代から小学一年生まで巾広い会員が加入され、十一月五日はだ寒い午前六時より桐林公民館で朝早いのに皆はりきって参加され発会式が行なわれた。

会員及び親達、公民館長を始め公民館関係者らも出席し、まず木下敦詞会長（駄科）の挨拶が行なわれた。副会長に関島政彦、松村嘉久男両氏、指導者十名程で進められる。又当日は上郷町の柔道クラブの子供達の模範演技の披露が行なわれた。会則も出来練習も週一回土曜日の午後五時より二時間行なわれている。桐林公民館を好意により借り、畳もそれぞれの場所から五十畳ほど借りて行われている。出席率も、いつも百パーセント近くで練習日ごとに会員も増え、正月には百名を越える見込。親子で又女子も参加されている。ただ場所がせまく交替でなければ練習が出来ない、又練習後畳の後片付もしなくてはならない点等を何とか解決されれば充実した練習が出来ると木下会長は話している。

又竜丘少年野球教室も小学生の四年から六年十九名が出席して、十二月九日発会式が行なわれた。公民館長の挨拶のあと会長の熊谷泰員さんが、まず勉強が大切で、その中で野球を通して身心をきたえて行きたいと挨拶された。

毎週日曜日、二時間小学校校庭で当面トレーニングを中心に始まる。二つの教室とも発展される事が期待される。

運動会は盛況

桐林分館が優勝

竜丘地区の市民運動会は、十一月三日天候に恵まれ、各分館の選手をはじめ区民多数の参加によりスポーツを楽しむ秋の一日となった。年に一度竜丘地区内の人々が顔を合わせ一般種目や分館対抗種目の競技を楽しんだ。

運動会役員には体育委員会が中心となり、審判団、準備・賞品係など連日連夜の協議、準備が進められ一方各分館では選手集めに当日まで奮闘、努力が行なわれた。青年会も例年通り競技全般の準備品作成と賞品用意を少ない会費で行った。

当日は、時又八王子社で採火された聖火は、小学生等により地区内を一周し、グランド内に作られた聖火台に点火され、競技が開始された。

今年は十二の採点種目、新しく婦人団体の対抗競技『ヘソクリ貯金』と分館対抗競技『夫妻善哉』が加わり、又民踊には各団体・サークルに小学生も加わり、前回より区民参加の輪が大きく広がった。

競技は熱戦の末『玉入れ』などで圧倒的な強さを見せた桐林が優勝、二位時又、三位駄科、四位長野原、五位上川路となった。又、応援賞は来賓の方々の投票により一位駄科、二位桐林、三位時又、以下上川路、長野原となり本館より金一封が送られた。午後四時頃に競技は全て終了し、各分館で慰労反省会が行なわれた。

後日の運動会役員全員による反省会での主な意見として、今年度は運動会を休んだらの意見もあったが、毎年行う事が良いのではないだろうかと位置付けられた。採点種目は誰でも参加できる種目にしてほしい（長野原・上川路）。応援団が応援をする時間のゆとりがほしい。応援賞は一位～五位でなく、アイディア賞、熱演・努力賞などにすると良いのでは。

マラソンを採点種目にしたら良い（長野原）。百M競争を行い竜丘一速い人を決めたらどうか。

ヘソクリ貯金は参加団体のプラカードを持ったら良い。体重二百㎏以下四人リレーはどうか。応援席は毎年変えた方が良い（上川路）など様々な意見が出された。

運動会の記録を残して次年度参考にする事となった。

鉛筆かついで

不動産業を営む傍ら地区安協会長、飯伊宅地建物取引業協会支部長等、要職にも多忙な市瀬時保さんを飯田市扇町にある事務所にお尋ねし「市瀬さんと言えば相撲、相撲と言えば市瀬さん」と言葉がかえる中で、相撲との出合いとなった亡き子供さんの事、苦労、喜ろこびの積み重ねの中で、市瀬さんにとって「相撲とは何んであるのか」奥さんと共にお話しをうかがいました。

大相撲を当地へ地方巡行に呼んだのは地元の土建業者との事だがやはり御当所力士、喬木村出身の「高登」の影響と言われる。

当時当地区の相撲協会の会長であった駄科の木下陽康氏の目にとまったのが市瀬さんの次男、勝美君であった。

その後大山親方（松登）に通じる所となり勝美君の体格、素質に惚れ親方自身四、五回足を運ぶほどの熱の入れ様であった。

やがて勝美君が両国の中学へと転校し郷土の声援を一身に負い大相撲の第一歩を踏み出したのである。まもなく資格としての検査も済みぶっつけ本番の取り組みにも勝ち越しを決め、四五年一月二番出世として初めて番付けの一番どんじりに名を連らねたのである。

亡き子供の恩返しを…

駄科　市瀬時保さん

初々しい勝美君、しかし百二十五㎏の巨体は、初土俵が同じであった学生横綱輪島と並ぶほどの期待が寄せられていたのである。

しかし喜ろこびも束の間大阪場所を前にして不帰の人となってしまったのである。

朗報を手に自宅に立ち寄ったその晩、急性の病に……旅先で愛児の死を知らされた時保さんは勝美君の最期を見届けれないままの辛い悲しい別れであった。

「勝美は短い生涯を精一杯生き幸わせだった」と、奥さんが声をつまらせながらの一言である。

市瀬さんは相撲協会のパイプ役として活躍、相撲見物の橋渡しや相撲部屋にリンゴやまむし焼酎を何年も送り続けているホットな話題もあり、なくてはならない人となっている。

亡き子供の恩返しに社会に尽くしたいと言う市瀬さん夫婦だが、遠山出身の山下君の親代りや、追善相撲の実現、又、剣道クラブの育成、奥さんの検察審査会の仕事はそれに余りある活躍ぶりだ。

市瀬さんにとって「相撲とは」心の支えであり、手離せない無形の子宝でもあるのである。

— 大山親方と市瀬夫妻 —

グループ紹介

〝歌う〟よろこびを…

【公民館コーラス】

「こんばんは〜お願いします。」「ドレミファソラシド」のピアノの音と共に「さあ始めましょう。」と言う元気よい先生の声で一瞬緊張をして練習が開始されます。

竜丘公民館コーラスは、四年前公民館の各種グループ育成の呼びかけで二十数名の混声合唱として誕生をしました。誕生当時時又保育園の援助をいただき、最初からピアノと広い練習場所、暖房設備などお借り出来て発足することが出来ました。

最初御指導して下さったのは、下伊那農業高校の佐々木先生でした。細々と始めたコーラスですが回を重ねるごとに何とか盛り上げなくてはならないと、励まし合いました。

指導が、佐々木先生の御都合で風越高校の高木先生にバトンタッチされ現在に至っております。音楽の力あふれる新任の先生に新らしい空気を吹き込まれ、又、会員増員に、練習にとハッスル致しました。練習曲も増し、どこかの発表会の席に出場して勉強をしてみようかと言う声と、先生の勧めもあって、市民音楽祭、南信音楽祭飯田市第一回公民館コーラス発表会、竜丘地区文化祭に出場致しました。

忙がしい中であっても熱意あふれる細かな御指導をして下さる先生のタクト一本に集中する一時は歌う者のよろこびを味わせてくれます。各種発表会にあっても竜丘公民館コーラスは、混声であると言うことで注目をあび、羨望視されています。バスの響きでコーラスの重さがあり、歌の心がにじみ出て年々充実してくると好評です

悩みの一つに、竜丘公民館まで遠方から夜歩いて往復することに抵抗があり会員が、友達を誘っても入会されない方があり残念に思っていたところ会員の相互の親切で近所の方達を車で送迎し熱心な出席の情景が見られます。ともすると怠け心がつき易いのを有線で呼びあったり、カセットテープに練習状態をとって帰って練習することもあります。

本年の市民音楽祭の発表も四曲程合唱しましたが昨年よりとても充実しているとほめていただき心良くしています。現在、火曜日を練習日として三十数名で行っています。時にはレクリエーションなどやっています。焦らず無理のない練習を第一と考え会員同士よく話し合い、より高度のものへと一人一人が努力し、歌の輪の広がることを願っています。

好条件の場所で練習が出来ますことに感謝し、地区内の皆さんの一人でも多く入会されんことを期待します。

告知板

◎**公民館主催の文化祭**が五十三年二月十一十二日の両日公民館で行なわれます。今度の文化祭は学習グループの発表会が中心で、他に展示、映画観賞等も行なわれます。四月からの一年間の学習の成果を発表するには良い機会ですので、今から準備を進めて下さい。（詩吟、コーラス、ペン習字、書道、婦人学級等、個人作品も展示されます）

◎**公民館委員研修旅行**が五十三年一月二十九日に瀬戸市の窯跡を見学に行くことに決定されました。（日帰り）

◎**恒例の新春放談会**が一月二十二日午後一時より公民館で行なわれます。今年行なわれている飯田市（竜丘）基本構想を盛上げる様「私ならこうする竜丘の将来」と題し、各種団体の代表者による意見発表が行なわれます大きな初夢を見てほしいものです

◎**公民館へ移された図書館**は、日中執務時間に、土曜日は夜七時半から九時まで開館しています一月には新刊購入も行なわれます。購入希望図書がありましたら申し出て下さい。冬の夜長、多いに利用して下さい。

◎竜丘に該当者が四百名いる**敬老会**は去る十月十日行なわれた。この日、百五十名の出席者の中に北原康平講師の「老後の健康」の講演が行なわれた。例年通り小学生の作文、民謡クラブの与興等、数々の作品が発表されなごやかな一日を終えた。出席された老人達はこの日、楽しく有意義な一日だったと喜こんでいた。

◎十二月四日小学校体育館で、八十余名が参加して初の**バドミントン大会**が行なわれました。結果は、一位時又、二位桐林でした。これは今までのバドミントン教室の成果が現われました。

あの人この人

（十月～十一月二十一日）

◎**永遠に幸あれ**

（中田良幸　桐林）
（村沢弘子　下殿岡より）
（牧内繁人　時又）
（今村ちさ子　川路より）
（沢柳真治　駄科）
（野牧恵子　南信濃村より）
（金山周司　鼎町）
（松永正子　駄科より）
（片桐義徳　豊丘村）
（熊谷則子　駄科より）
（岡島弘幸　時又）
（俵絢子　長崎県より）
（藤本貞一　竜江）
（伊東ちず子　駄科より）
（熊谷博邦　長野原より）
（牧内澄子　川路）
（関谷藤吉　川路）
（原順子　桐林より）
（大沢正司　松川町）
（林修子　時又より）
（三浦紀男　静岡県）
（村松真知子　時又より）
（松原道男　八王子市）
（大平貞子　駄科より）
（伊坪忠志　阿智村）
（松下三枝子　桐林より）

◎**伸びよ健やかに**

氏名	部落	父名
下平幸子	桐林	広
関島美咲	桐林	文次
坂井剛	時又	康助
関島祐平	駄科	新一
塚平由美子	上川路	英行
今岡由美子	駄科	良三
下平一博	時又	拡司
小林健一	長野原	仁
今村亜希	長野原	文二
前沢良子	長野原	正信
松永綾子	駄科	勝政
塚平晋也	上川路	学
牧島登代子	駄科	重高
林ゆき子	桐林	数美
下井田めぐみ	長野原	実
柿下真由美	駄科	勇治
久保田涼子	駄科	和彦
下平由実子	駄科	善彦
大沢裕次	時又	健男

●**ご冥福を祈る**

氏名	部落	性	年令
高島寿々ゑ	桐林	女	七八
今村岳	上川路	男	八二
関島きわ	駄科	女	六七

編集後記

おわび

前号で、竜丘財産区の記事をのせましたが、その中で、財産の項で誤りがありましたのでおわびし訂正いたします。正しくは、山林一四、五ha、保安林四〇ha、原野二、四ha、田六、五アール、合計五七haです。

館報が一五〇号となったので、その変遷について載せてみました第一号からの館報をさがし出すのに一苦労、保存について考えなければと痛感。調査の段階で、九一〇、一一、二一、二五、一一三一一五号が出てきませんでした。もしお持ちの方がありましたら公民館までお知らせ下さい。又、古い館報を見直してみるのも楽しいこと。縮小版の発行について編集子として、ぜひ実現させたいと考えています。

師走となり今年もあとわずか、今年最後の館報をお届けします。十分吟味して下さい、来年もさらに厳しい年になりそうです。良、お年をお迎え下さい。広報部一